

第2回 本のまちビジョン検討委員会 議事要旨

日 時：令和6年10月24日（木）15：30～17：30

場 所：こども健康センター会議室（パピオスあかし6階）

I 会議次第

- 1 開会
 - 2 市長あいさつ
 - 3 出席者の紹介
 - 4 これまでの振り返りと今後の方向性について（説明）
 - (1) これまでの振り返り
 - (2) 今後の方向性
 - 5 意見交換
 - 6 その他
- 閉会

II 出席者

委員

吉成会長 木原委員 佐伯委員 嶋田委員 瀬尾委員 平賀委員 横山委員

※佐伯委員と平賀委員はオンラインで出席

関係部署

明石市

丸谷市長 佐野副市長 福嶋理事（総合政策担当）

政策局

久保井政策局長 山口プロジェクト部長

中川次長（本のまち担当）兼プロジェクト推進室課長

教育委員会事務局青少年教育担当

谷田青少年教育担当課長

プロジェクト推進室本のまち担当

神尾係長 山畑係長 寺前事務職員 山居事務職員 森事務職員

Ⅲ 議事内容

(司会進行：山口プロジェクト部長)

1 開会

傍聴者数及び会議成立の報告、資料確認

2 市長あいさつ

3 出席者の紹介

資料2「出席者名簿」参照

4 これまでの振り返りと今後の方向性について(説明)

会 長：ここからは私が進行させていただきます。皆さんよろしくお願いいたします。

まずは明石市の取り組み内容について、事務局からご説明いただきたいと思います。

(中川次長(本のまち担当)より説明)

※資料1～3及び検討資料①～④参照

5 意見交換

会 長：事務局、説明ありがとうございました。意見交換に移る前に、説明に対する質疑や感想等ありますか。

委 員：本のまちにおける連携とありますが、公的私設やボランティアが主で、企業が入っていないのが気になります。企業も含め、もっと色々な人たちを巻き込めるのでは。例えば、もうすぐ開館する二見図書館では、地元企業と積極的に連携していければよいと思います。

委 員：同じく連携に関して、明石市の各政策部門との関わりはどうでしょうか。明石市全体として「本のまち」を推進しようとしていることは素晴らしい。市立図書館等が、市の様々な施策にどう絡んでいくかということも、ビジョンで表せればよいと思います。

会 長：これ以上質疑・感想等はないようですので、意見交換に移ります。まずは「検討資料①本のまち明石の目指すイメージ」について、市長からこの図で全て表したいという発言もありましたので、この資料をベースに議論を進めたいと思います。

委 員：この図の中で、市が何をやるのか、市は何を考えてブックスポット等を設置するのかといったことを示した方がよいのではないのでしょうか。第1回検討委員会でも、本のまちづくりがもたらす社会的価値に言及されていましたが、市としてそれぞれの場所や活動にどういう価値を見出すか、そのイメージがまだ十分に表現されていないように思います。

例えば「学校図書館との連携」とありますが、学校図書館がどうあるべきか、市がどういう方針で設置しているかといったことが示されていません。事例として、伊勢市広

報が行った読書推進の特集では、学校図書館を読書センター、情報センター、学習センターの3つの機能を持つものとして紹介していました。そうした位置づけと、できればその実現のための取り組み・体制まで示す必要があるのではないのでしょうか。天文科学館等の文化施設や民間ブックスポットについても同様に、それぞれが実施している取り組みやプログラム等が、本のまちにとってどういう社会的価値を提供しているのかを示してはじめて、本のまちにおける連携が実現すると思いますし、逆に言えばそれを示さなければ連携も協働もあり得ません。その点についての議論が必要ではないのでしょうか。

会長：企業との連携と、学校図書館についてのお話をいただきましたが、まず皆さん今の思いなどお話いただいた方がよいかと思います。どなたでも自由にご発言ください。

委員：「検討資料①本のまち明石の目指すイメージ」で連携を示す緑の矢印について、現状は施設と施設であって、人と人ではないのが気になります。また、黒線の四角で囲ってある「子どもの読書推進」等の取り組み、その表し方が重要だと思います。先ほどお話があったような各場所のあり方と、この取り組みが上手くリンクする必要があります。

会長：その点に関しては、今回の資料作成にあたって事務局の方でも色々と検討されたことかと思っています。事務局から何か補足説明などありますか。

事務局：「検討資料①」内の取り組みについては、皆さんのご意見を参考に記載させていただいている。今回の意見交換を経て、さらにバージョンアップできればと考えている。

会長：確かに、この部分に何を置くかで、見え方も大きく変わってくると思います。その点にもご留意いただいて、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

委員：私は現在大学生の立場ですが、周囲の友人のうち、紙の本を読む人はかなり少ない印象です。本のまちづくりを推進していくうえで、アナログとデジタルのバランスは考えるべきかと思います。小学生の妹がいますが、小学校の授業でもタブレットの使用がどんどん進んでいますが、本のまちで人とつながる上で、果たしてデジタルで完結してしまってもよいのか、という疑問があります。教育のデジタル化推進におけるスタンスについて、市教育委員会の考えを聞いてみたいです。

事務局：明石の小学校では現在、「ロイロノート」というアップル社製のタブレットを使用している。5～6年生は十分活用出来ているが、4年生以下はローマ字入力の関係で使いこなせているとは言い難い。また図書のデジタル化について、kindle等で小説をはじめとした読み物は豊富に揃うが、授業に活用できるものは需要の関係から種類が少なく、特に図鑑は非常に高価であるため、なかなか導入が進まない。学校教育としてはデジタル化を進めていきたいが、アナログにはデジタルに無い長所もある。デジタルはタイムリーに情報へアクセスできる一方、受動的な学習になりがちであり、自ら調べるには紙の本の方が向いている。それぞれの長所を生かし、バランスを取りながら進めていきたいと考えている。

委員：10月22日の読売新聞にて、「スウェーデン 電子端末で学力低下」との見出しがあり、教科書を紙に戻すことで学力向上を図るとありました。デジタルは万能ではありませんが、デジタル化が今後も推進されていく中、デジタルシチズンシップ教育や主権者教育の面からも、能動的にデジタル情報を取得し使いこなす能力は必要です。とはいえ

教育現場では「デジタル端末を使用する」こと自体にウエイトが置かれ、紙の本をうまくいかせていない現状があります。自治体によっては、デジタルで情報をキャッチし、紙で詳細を調べるといった使い分けをしているところもありますが、全国的にはまだまだ進んでいません。先ほどご指摘があったように、生活の中にデジタルが当たり前に溶け込んでいる中、紙の本の役割についてもっと議論されるべきでしょう。今回の検討においても、本のまち明石における本の役割とは何か、例えば情報なのか感動なのか、を考える必要があります。

委員：市が直接やることとそれ以外の見せ方を変えるべきというのは、その通りだと思います。明石市のビジョンとして、市が取り組むことや市の考え方についてはある程度詳細に示すことができますが、各施設や団体を対象とした内容については、やるかどうかも含めて各主体に委ねられているので、あまり細かく決めすぎない方がよいように思います。また「検討資料③本のまち明石で大切にしたいこと」について、本のまちに関わる以上守らなくてはならないルール、のような印象を受けました。そういうものではなく、「こうなったら楽しい」くらいの雰囲気の方がよいのではないのでしょうか。

会長：私も同感です。楽しみながらとか、創造的な対話や創発が起きるような関係性を生み出していくことなども、表現できればいいなと思いました。また企業連携についても、色々な形があると思います。ちょうど先週、前橋市でブックフェスが開催されましたが、その主体となったのは企業と商店街でした。企業連携については想定しきれない可能性があると思いますので、そうしたことも踏まえた考え方がビジョンに入れられるとよいと思います。

委員：図の中に書店も入っていますが、書店についても明石市あるいは明石市民にとってどういう存在であると考えているか、ビジョンに書くことは大事なことだと思います。ここ数年、書店の存続を危ぶむ声もある中、明石市として書店や出版社に継続してほしいと思うかどうか。本を通じて表現したいという人のための事業として、書店や出版社を応援していきます、というようなことを言えるといいなと思います。それに関連して、現在あかし市民図書館はどこから本を購入しているのでしょうか？

事務局：市立図書館について、雑誌は市内の大型書店から、それ以外の書籍は TRC で購入している。ブックセカンドで配る絵本は市内の書店組合から購入。図書館の雑誌も、当初は書店組合から購入していたが、先方から断りがあったため、それ以降大型書店からの購入となった経緯がある。

委員：市の事業においてどこから本を買うかは、市が事業者や本のある場所をどう考えるか、ということを実績として表すという意味で非常に重要です。購入先を考える際にはまずコストをもとに検討すると思いますが、ビジョンに「市内の書店を応援する」と定めておけば、その指針に立ち戻ることができます。それが市内の書店を支えるという市の姿勢につながると思います。ブックスポットについても同様で、「マイクロライブラリー憲章 (<http://micro-library.com/charter/1.0/>)」のように、定義と何を応援するかについて定める必要があると思います。

会長：今のお話は、「検討資料①本のまち明石の目指すイメージ」の一番上の四角の中、特に

右側の「対話と交流が生まれ、人と人がつながるまち」の部分と結びつきますね。この部分がある意味では重視する価値を指しているとも言え、そういうものを市としてどうやって応援するか、ということがビジョンの根幹になるのでは、と思います。

委員：重視する価値について、本のまち全体に対してはもちろん、それぞれの本のある場所や事業者、取り組みに対しても示す必要があると思います。

会長：書店と出版社が市内にあることは明石の強みだと思いますし、だからこそそれらを応援しようという方針になればと思いますので、ぜひビジョンにも表したいですね。

委員：これまでの話と関連のない内容になりますが、イメージ図では真ん中に市立図書館があり、さらに新しくできる図書館はまちのパブリックスペース、リビング&ライブラリーと位置付けられています。これからの本のまちの中で、これら新しい図書館は創造されていくものと思いますが、市長にお伺いしたいこととして、この政策（本のまちづくり）におけるキープレイヤーは誰だとお考えでしょうか？

市長：市民だと考えている。

委員：ありがとうございます。「明石市協働のまちづくり条例」には市民だけでなく、市民協働のための職員の役割及び人材育成についても示されています。本のまちづくりにおいて市民と協働していく際、最前線に立つのはやはり図書館司書だと思いますし、イメージ図でも図書館の役割としてコーディネートが挙げられています。残念に思うのは、事務局である本のまち担当に司書資格を持つ職員が1人しかいないこと。そのため、図書館の現場を知るためには今回のようにヒアリングが必要になります。その良し悪しはともかく、私は本のまちづくりを推進する中で、あるいは新たなコンセプトの図書館ができていく中で、図書館における市民協働を推進する司書が「協働のまちづくり条例」に定める人材育成の対象であってほしいと思います。図書館運営を直営から委託に切り替える自治体は多いですが、そうすると図書館における市民協働が間接的なものになってしまいます。公務員としての図書館司書が、現場の肌感覚を施策形成に反映できるのが理想だと思います。少し大きな話ではありますが、新しい図書館が立ち上がる際に、現状を前提としてしまうのではなく、将来的な体制について検討するのも大事ではないかと思います。

会長：市立図書館の指定管理者へのヒアリングに同行しましたが、現場の司書としては、本の貸し借り業務だけではなく、そこからどう発展していくかを試行している・していきたいというお話を色々と伺いました。ただ、司書の役割である「つなぎ役」としてその意識で十分なのか、新しい図書館ができていく中で体制面はどうするか、というお話ですね。この点は本のまちビジョンや図書館整備と並行して考えるべきと思っています。

委員：図書館の市民との連携・協働については、実際に動いてみてまだまだ足りないと感じています。図書館と市民と一緒に考えてやろうという取り組みは行っていますが、お互いの言っていることがうまく伝わらないという経験が何度かあり、コーディネート力が試される場面なのかなと思います。二見・西明石の図書館は「交流」がコンセプトなので、新たな取り組みが期待できるのではないのでしょうか。また、レファレンス力も非常に重要だと思います。資料探しに対する相談を通じて、その人の抱える課題も見つ

け出すことができる、専門性の高い能力なので、その点も図書館司書に期待しています。

委員：コーディネーターとしての、いわば宿題を与えられて、司書がそれぞれ現場で1人頑張るのではなく、本のまちづくりにおいては本のまち担当と一緒にやっていくことが必要と思います。学校司書は先生方と子どもたち・保護者をつなぎ、子どもたちの学びを実現するためのコーディネーター。文化施設の学芸員も、生涯学習に関わる人達をつなぐコーディネーター。市立図書館でもコーディネート機能・レファレンス機能が必要とされ、また新たにできる図書館はリビング&ライブラリーとして、地域活動にも関わっていくこととなります。そういう内容をビジョンにしっかり表す必要がある。「コーディネート」という大きな言葉を投げかけるだけでその先は個々に委ねるのでは市民自治とは言えず、市がどうやって支えていくか明記すべきだと思います。その役割を担う人に対して、1人でやるんじゃなく皆でやっていくんだよ、っていう。

会長：そうですね。イメージ図の中に人を入れていますが、ここの表現も工夫しなくてははいけませんね。司書等、いわば普通に仕事している人たちに、市は何を求めるのかということが伝わるように。

委員：学校図書館について、現状どのような体制でしょうか？自身が学校司書をしていた時には1人1校配置で、十分手厚く子どもと関わることができていましたが・・・。

事務局：明石市では現在21名の学校司書を小・中学校に配置している。1人あたり2校を担当。学校司書は正規職員でなく、1年契約を基本としたパート勤務。家族の扶養内での勤務を希望する方もいれば、週5勤務している方もいる。1週間のうち担当各校に1日もしくは2日勤務しており、例えば勤務日が週3日であればA校に1日、B校に2日といった形。学校司書の役割として、学校図書館の本の整理や子どもたちへのレファレンス対応、授業で使う図書についての先生方からの相談対応等がある。今年新しくなった国語の教科書に載っている著者の著書に関する情報提供や、修学旅行先に関する調べ学習の協力なども行う。また市立図書館の団体貸出等利用に際してのつなぎ役となったり、図書ボランティアと一緒に活動したりしている。行政との窓口は青少年教育担当が担っており、司書資格・経験を持つ学校司書支援員が、それぞれの司書をサポートしている。

委員：ありがとうございます。自身の経験から、学校司書の勤務日はせめて週3日はあった方がよいと思います。先ほどお話があったように、学校図書館の役割と目的について、しっかりと整理して明記したいですね。

会長：伊勢市の事例を出していただいていたのですが、あのよう学校図書館について定義しながら実践している事例というのは、まだまだ少ないのでしょうか？

委員：学校図書館で有名な岡山市の小学校では正規職員の学校司書が配置されていましたが、定年退職等で減少しています。伊勢市では、学校司書と司書教諭の連携が密な小学校もあります。司書教諭は専任ではないものの、先生方と司書教諭、学校司書のトライアングルで仕事をしている小学校もあるということです。学校図書館法には、学校図書館の役割として「児童の教養に資すること」「学校教育課程の展開に寄与すること」が挙げられていますが、一般的に取り上げられるのは貸出冊数が何倍になった等、読書センターとしての機能だけです。例えば昔の暮らしや仕事について学ぶ際、板書やテキス

トだけでなく図書館へ行けば、様々な昔の仕事や衣食住に関する本の中から、子どもたちがそれぞれ関心のある本を手にとって自ら調べ学ぶことができます。瀬戸内市で調べ学習にタブレットが導入された結果、調べる学習から答えを見つける学習に変わってしまった。子どもたちの興味関心ではなく、タブレットの活用が目的になった結果、学校図書館の利用が減ってしまったという事例です。タブレットをうまく使わないと、学校図書館の情報センター・学習センターとしての役割は後退してしまうと思います。

会長：その点は大人の司書、つまり市立図書館の司書も同じですね。相談や質問に対してどういう選書をし、それをどう伝え、コーディネートするか。そういう力が無いとつなぐことはできないので、そのこともビジョンに明記したいと思います。

委員：タブレットの活用については、先生や司書のスキルが追いついていない部分もあり、単にプレゼンの道具としてタブレットを使っている例も少なくありません。紙の本だけでなく、タブレットでどう情報を探索し、それをどう理解して表現するかという視点で活用している学校とそうでない学校で、能力の差が開いていってしまうと思います。この点についてどうにかしたいと思うかどうか、また取り組むにあたって先生や司書だけで十分なのかどうか、司書の勤務体制は現状で十分なのかどうか、それを市としてどう考えるかが重要だと思います。市立図書館についても同様で、今の取り組みのままでよいのか、中央図書館と分館でどういう役割分担をするか。そうしたことをビジョンで示さなければ、現状は変わらないのではないかと思います。

会長：そうですね。そういったことについて、我々検討委員からもこうあってほしいという意見を出し合う必要があると思います。

委員：ブックスポットや学校図書館について、市の中でも話し合ってみてほしいなと思います。また天文科学館や文化博物館などの文化施設についても。文化博物館は別にあり方検討会を実施されているという事ですが、そちらの内容も本のまちビジョンに盛り込まれるとよいと思います。

委員：改めて、骨子案の中でも大事なものは「本のまち明石で大切にしたいこと」の部分だと感じます。表現が固いというお話がありましたが、この部分に市の思いが込められていると分かりやすいのかなど。明石市民にとって本のまちとは何か？ということをお伝えたいです。キャッチフレーズのようなものは陳腐化しやすいので、エッセンスを盛り込みながらしっかり語られているといいなと思います。

委員：今のお話と関連して考えたことに、リビング&ライブラリーの「リビング」とは何か？ということがあります。一般的にはくつろいだりコミュニケーション等の行為や、そのための場所というイメージですが、語源にあると「元の状態」「元の場所」というニュアンスで、個人的には「本来の姿」と解釈しました。明石で大切にしたいことを、このリビングという言葉に込められるといいなど。うまく言えませんが、例えばウェルビーイングとか、心身の健康だけでなく自分の可能性を信じられる、いわばエンパワーメントされた状態のような。それをうまく表現して、ビジョンに入れたいと思います。

会長：本来の姿というのは個人の自省だけでなく、この町はどういう町か、という意味でも重要ですね。町のこれからを考える際には、そもそもこの町はどんな町で、何を一番大

事にしたらよいのか、に立ち戻る必要があります。本のまちビジョンでどこまで表せるか分かりませんが、明石にとって大事なものが全体をつなぎ、また市民にとっての誇りにもなりますからね。市として「リビング&ライブラリー」を定義して、市民に分かりやすい言葉で伝えていきたいですね。

委員：骨子案のアウトカムについて、元の状態・自分らしくに加えて、本の役割としての「他者への想像力」みたいなものも入るといいなと思います。また、ビジョン全体を一市民として見ると、「検討資料③本のまち明石で大切にしたいこと」の書き方がやはり気になる。誰が誰に言っていること？という点で引っかかる。そもそも多くの市民にとって「本のまち」という言葉がまだ一般的ではありません。ブックスポットという名称ができる前から取り組んでいる人にとっては、いきなり「本のまち」「ブックスポット」等の冠をかぶせられるようなもので、それが何となく良くないというか、そのことによってやらされ感が生じるのは避けたいとおもいます。ビジョンで示す理想像に誰もが納得し、そこに自分も参画するんだと思ってもらいたい。市から「あなたたちはこういうことをやるんだよ」というものではないはずなので、連携や取り組み等、細かく決めすぎない方がよいと思います。本のまちづくりに必ずしも当てはまらない活動も、自主性を重んじて応援できるような、広く包含できるようなビジョンにしたいです。

会長：本のまち明石で大切にすることについてのご意見を伺っていて、ビジョンという言い方よりむしろ、これまで関わってきた人もこれから関わる人も含めて、明石は「本のまちづくり」という宣言をするような、これからスタートしますという宣言という形の方が近いような気もします。本のまちの中でどういう価値観を大事にするかということと、本のまちは誰をも受け入れる大きな皮袋のようなものであるという図があって、そのことが伝わればよいのかな、と。新しい図書館がこれまでと違うコンセプトで出来上がるタイミングで、新たにスタートするようなイメージになりそうですね。

委員：市の施策と地域全体のイメージ、それぞれの視点から見た主体が重ならないのはある程度仕方がないと思います。市が基本計画を定めたといっても、必ずしも市民にとってのビジョンでは無いわけです。「本のまちビジョン」もあくまで市のビジョンであり、これが押しつけがましくならないためには、「本のまちはこういうことを目指します」「市はこういうことを応援します」というメッセージが必要です。ただの言葉ではなく、具体的に誰がどう動くのか想定しないと絵に描いた餅になってしまいます。それぞれの主体に応じた役割の違いをもう少し考える必要があるのでは。

会長：規定しすぎるのではなく、緩やかに線を引く必要がありますね。

委員：少し話が逸れるかもしれませんが、本のまちづくりに関わる人や活動がこれだけあるのに、それが市民にどこまで伝わっているか分からないのは勿体ないですね。今日のこの議論も公開されているとはいえ、ほとんどの人が知らないわけです。本のまちに関する情報をどうやって伝えるかが重要だと思います。

会長：本当は検討過程も見てもらいたいですね。ビジョンを作っただけでは意味がありませんし、その過程に関わるプロセスも知ってもらう必要があります。委員のメンバーだけで決めてしまうようなことではないので、今はそういったことも含めて検討する

段階にありますね。

委員：市の取り組みとして情報発信も重要ですよ。ここを見れば全ての情報につながる、例えば「明石 本」で検索すれば全ての情報につながるような情報媒体が最終的に必要になると思います。

会長：情報を伝えることは重要ですね。

委員：今回あえて「本のまち」と掲げたのは、バラバラだったものを「本のまち」という軸で包含するような世界を描きたい、ということなのだと思います。子育て支援だけではなく、全ての施策にとっての柱として「やさしさ」があるとして、本はその出発点やきっかけということですよ。本を読んでもらうためではなく、子どもや大人がどうなっほしいかを踏まえた上で、それぞれの場所のあるべき姿についての規定が必要になりますね。

会長：本のまちを始めたきっかけについて、市長の思いはいかがでしょうか。

市長：明石には2つの大きな図書館がある。そこからさらに3館増やして5つの図書館にしようという構想が市長就任時点であったものの、新たな図書館がどういうものかについては話し合われていなかった。既存の図書館と同じような方向性でつくるのか、それともそれぞれに特色を持たせたうえでつくるのかで、明石のまちの未来も変わってくる。そもそも明石が目指す本のまちとは何か、そのためにそれぞれの図書館はどう機能するのか。さらに、明石には図書館以外にも、本に関わる市民や、公共施設も含めた様々な空間がある中で、それらがどうつながり、どういう相乗効果が起こるか。ここで暮らしてよかったと思える、子どもたちが夢を持って成長できる、大人も幸せに生き生き暮らせる、明石をそういうまちにしていくためには、やっぱりビジョンをしっかりと定める必要がある。ビジョンがあれば、指定管理者ともしっかりと共有しながら同じ方向を向いて、本のまちを進めていけるのではないかと考えている。現状、指定管理者の取り組みが市の方向性と一致しているかどうか明確ではないので、そうしたことも含めて、検討委員会で議論されているようなことをぜひ進めていきたい。また、本のまちビジョンについて、明石本のまち大使である上田岳弘さんが「自分も何か力になりたい」と仰っていた。兵庫県書店商業組合の方々は、先日あかし市民広場で「絵本ワールド」というイベントを開催され、当日会場には明石にゆかりのある作家や出版社がたくさん集まっていた。さらに、ある出版社からは無料で派遣している「おはなし隊」キャラバンカーの案内もいただいた。こうした広がり是非常に大事だと思っている。また、先ほどお話されていたように、本のまちに関する情報やこの検討委員会の内容について多くの市民に知っていただき、本のまちを応援したいと思って下さる人が関わる大きなフォーラムのような場を設ける等、発信のための仕掛けも考えていきたい。そういうことも含めて、みなさんのお知恵をお借りしたいと思っている。

今回、事務局である本のまち担当が作成したイメージ図について、自分が最初に描いていた中では、真ん中に既存およびこれからできる図書館があり、次に身近な本のある公共スペース、さらに市民の方が主体となって運営されている本のあるスペース、という整理をしていた。その枠組みを外したのが今日お示ししている図。この図につい

てもどういう整理がよいのか、その辺りも議論していただければと思う。

会 長：ありがとうございます。イメージ図の中に、人の動きや、それぞれが何を思い、何を
目指しているのが本のまちなのかということが、入っているといいなと思いますが、い
かがでしょうか。

委 員：本と一口に言っても、様々な活動・関わり方をしている人もおり、その思いも様々な
ので、1つには決められないと思います。例えば自分たちは「不思議の国のアリス」に
出てくるお菓子づくりとお茶会を通して、絵本の世界を体験するという催しをしました。
そんな感じで、どのような活動も本に関わるといえるのではないかと。本を読みなさい、
じゃなくて、本を通して心が豊かになったり、辛いことがあった時に本で救われたり
といったことがあれば嬉しいと思いますし、子どものころあまり図書館に行けなかった親
世代の人もいます。身近に本とつながることができる、本がある場所で本を読
んだり、そこでやっているイベントを楽しむという経験も子どもたちにしてほしい、そ
ういうことが起きているのが本のまちだとイメージしています。

会 長：どこかの小学校で、使われていない下駄箱を本棚にしているという事例をお聞きし
て、楽しみながらやっているんだらうなという感想を持ちました。本があることでワク
ワクする場所を作り出せるということを示してくれる事例が、明石でもいくつか見えます
ね。それも新しい本のまちの、一つの魅力的なあり方なのかなと思います。

委 員：骨子案について、イメージ図の次に「Ⅱ-4」として、それぞれのプレイヤー（主体）
は何をしているところで、何を期待するのか、さらに市はどのように支援するのかとい
うことを明記するといいですね。例えば出版社や書店は市民の知的な活動を支える、あ
るいは本と触れ合う場を用意してくれている、ユーススペースは若者たちがこういう風
に過ごせる場所・・・というように。そして市としてはそれらが持続・発展していく
ことを応援する、というイメージ。このようにそれぞれの場所についての記述があれば、
連携方法についてもおのずと見えてくるのではないのでしょうか。そうした内容について、
市の中で議論していただければと思います。

会 長：人が入りかけた図を事務局で作成しているので、これをもう一進め、それぞれが出来
ることや、市が期待することについて等が入ると厚みが出てくるように思いますね。

委 員：色々な動きをしている人たちが、それぞれ円で分かれるのではなく、交わっていく図
になっていくといいかなと思います。絶対交わっていきますよね。

会 長：確かにそうですね。他にアイデアなどありますか。

委 員：本のまちに関わるプレイヤーに市が期待する役割について、ヒアリングやディスカ
ッションする機会を設けて、ということが必要なのかなと思います。

会 長：そうですね、単に紙のビジョンを作るだけでなく、実際に動きながら。一緒の船に乗
っていくとか、同じ方向性みたいなものを、見た人に感じてほしいと思います。

理 事：事例の紹介として、尼崎市の総合計画「45万人のまちづくりBOOK」がある。まちの
様子やそこで暮らす人たちをストーリー仕立てや漫画にして紹介したもの。皆さんのお
話を聞いて、本のまちに関わる人たちや取り組みの表し方の参考になるかもしれない
と思う。また、本のまちビジョンなので、その成果物が冊子になっているというのも

- 面白いと思い紹介した。
- 委員：先ほど話し合っていた、各主体の取り組みやそこに期待することなど、具体的に書く
とご紹介いただいたような内容に当てはまるかもしれませんね。
- 会長：ありがとうございます。総合計画を物語仕立てにするという事例はいくつかありま
すね。内容がある程度まとまった段階でどう表現するかという点で、ご紹介いただいた
ようなやり方は、明石らしさにつながるかもしれません。時間が残り少なくなりましたが、
委員の皆さん、言い残したことなどありませんでしょうか。
- 委員：骨子の中に「市がこういうことを応援します」を入れるのはいいなと思いますが、だ
とすると最後に「市が取り組むこと」を示すのは違和感があるといえますか、「これを
応援します」でなく「市がこれやります」をわざわざピックアップすると強調されすぎ
るような気がします。また、先ほどもお話が出ていましたが、ビジョンをつくるうえで
主語が何か、誰が誰に言っているのかというのは分かりやすく整理されているといいな
と思います。あと、イメージ図では「本とつながる」「本からつながる」の2つを柱に
しようとされていますが、何となくポジティブな面だけをイメージしている感じが強い
気がして、「つながらない自由」もあっていいのではと思います。ただ本と向き合える
場、良い意味での逃げ場も必要なはずで、必ずしもつながっていくだけではないとい
うような。自身の学生時代を振り返ると、人に会いたくない時に図書館をよく利用して
いたので、そういうアクションやあり方みたいなものも、寛容に包容できるビジョンであ
ってほしいと思います。
- 委員：「Ⅲ 本のまち明石で大切にしたいこと」はビジョン全体にかかるものであるとして、
先ほど「Ⅱ-4」として提案した内容を「Ⅳ 市の取り組み」で示してもいいですね。つ
まり「市がやること」を書くというより、市の姿勢やあり方、それぞれの主体や活動を
どう応援するか、そのためにどういう人材を置くかといった取り組みを示す。Ⅱの図に
ついては、本やつながり以前に、それぞれの主体や場が持つもともとの機能、例えば「安
心して子どもとコミュニケーションが取れる」みたいなことがまずあるわけですから、
そうしたことをしっかり記述すれば、「つながり」についてのニュアンスも程よいもの
になるのではないのでしょうか。そういう意味では「Ⅲ 本のまち明石で大切にしたいこと」
がビジョンに近いものになっていくのかもしれませんが。
- 会長：ありがとうございます。その辺り、書き方の影響も大きいですし、全体の中に市が応
援することというような内容が入っているとずいぶん変わってきますので、ぜひ事務局
の方でも考えていただきたいと思います。はい、そろそろ終わりの時間ですが、皆さん
いかがでしょうか。
- 委員：市が事務局として有識者会議をしながら作るビジョンということで、事務局へのプ
レッシャーも強いと思いますが、市民を信頼しながら作ってほしいなと思います。本の
まちというのは明石市民 30 万人総出でつくっていくもので、市がやるんだと言い過ぎ
なくてよいのではないかと。
- 会長：その点は事務局にも伝わっていると思います。
- 委員：ビジョンの最初にまず「市民主体で」と入れたいですね。

会 長：そういうことですね。大事なことなので絶対必要だと思います。

委 員：市民主体で進める本のまちの中で、市は何を応援するのかというニュアンスをきちんと表したいです。

会 長：本のまちビジョンではありますが、協働の要素も入ってくるイメージですね。はい、それでは定刻になりましたので、事務局にお返しいたします。

6 その他

山口部長：吉成会長、これまでの進行ありがとうございました。委員の皆様、様々なご意見や事例の紹介と、活発な意見交換をありがとうございました。それでは最後に市長から一言いただきたいと思います。

丸谷市長：今回も皆さまからたくさんのご意見をいただきありがとうございます。自分としても本のまちについてのイメージが生まれてきました。先ほど申しあげましたように、先日開催した市民ワークショップの参加者の皆さんも含め、本のまちづくりを応援したいと思ってくださる方がたくさんおられますので、大変なご議論だとは思いますが、引き続きご意見をいただきながら進めていきたいと思っています。今回のご意見を受けて、事務局とともに骨子案をブラッシュアップしてまいります。もちろん市民目線・市民主体で進めていきたいと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。また、傍聴の皆さまもたくさんお越しいたいただき、ありがとうございました。

事務局からの連絡事項

今後のスケジュールについて

・第3回本のまちビジョン検討委員会・・・11月開催予定（日程調整中）

閉会